



# 神様の声

「こんにちは。入院中はお世話になりました」

数カ月前にリハビリ病院に転院したI君があいさつに来てしていると聞いて、勤務の合間に少し時間をもらい救急部の受付に向かった。相変わらずきれいな顔をした少年である。照れくさそうにあいさつする彼を見て、少し障害は残ったけれど歩けるようになったんだあ、と喜んだ。

彼は、高校1年生の時に、自転車の単独事故で搬送され、重度の脳挫傷で入院。しばらくの間は低体温療法を行い、その後、少しだけベッド上でのリハビリを行っていたが、話せるようになるまでの回復を見届ける前に転院した私の受け持ち患者さんだった。彼をさすりながら「おはよう。今日も一日よろしくね」などと声を掛け、閉じたまぶた

から伸びる長いまつげを眺めていた。

まだ若いお母さんは、冷たい彼の体に触ると「ごめんね。寒いよね。がんばって……」と涙を流していたが、きつと元気になるだろうと信じて私はいつも明るくいろんなことを話し掛けた。

状態が安定し、麻酔やクーリングも不要になり、開眼できるようになった彼であったが、視線は合わず、話し掛けても反応はなかった。「聞こえてるんでしょか……」と、心配そうなお母さんに「きつと聞こえていると思いますよ」と返答したものの、私にも分からなかった。

「元気になったね。学校にも行ってるんだってね。勉強がんばりや」と、少しハッパを掛けるような声を掛けた。すると「あ、この人や。神様の声の人や」

と、うれしそうにさげんだ。

「いつも話し掛けてくれる人がいたけど声しか覚えてない。誰やったんやろう。神様やったんかなあ、っていつも言ってたんです」

「これからお仕事がんばってくださいね」

その声こそ、私にとっては神様の声であった。

〈大阪府〉おおい 大井 まりこ 真理子 47歳

